

SPAC高校演劇フェスティバル

言葉と出会い、身体と出会う

もうひとつ先の非日常の世界へ

SPACは、これまで県内高校演劇部に対して技術指導をおこなってきた実績を踏まえ、高校演劇との関係をより充実したものへと発展させたいと考えています。そこで2009年2月、装いも新たに、私たちSPACの主催による「SPAC高校演劇フェスティバル」を開催します。

●高校演劇の限界を超えるために——

私たちがこれまで、高校演劇に接してきた経験の範囲で感じているのは、「高校演劇は見応えのある作品を創る実力をじゅうぶん持っているが、演出や演技の方法は、もっと多様であっていいのではないか」ということです。例えば演技に関して、しばしば「自然な演技でよかった」「リアリティがあってよかった」という感想が交わされる点に見られるように、高校演劇では多くの場合、日常生活における人間の発話や行動を再現することが目指されています。しかし、台詞を発するにも平常の数倍の音量を必要とすることからわかるように、舞台上における俳優の発話や行動は、もちろん、日常そのままの通りでは成立しません。では、いったい、どのように台詞を発し、どのように身体を動かし、どのように表現すべきなのでしょう？ もちろん、この問いに正解はありません。演劇集団の数だけ、答えが存在するといっても良いでしょう。そこで、ぜひ高校生の皆さんにも、この問いを共有してもらいたいと私たちは考えています。この問いは、プロとアマという垣根を越えて、全ての演劇の担い手にとって永遠の課題であるからです。

●演出と演技を磨く実験場として——

会場として、舞台芸術公園・稽古場棟「BOXシアター」を提供します。小さいながらも緊張感があり、観客の集中度が増す空間です。ごまかしのきかないこの空間では、従来より以上に演出と演技を磨き、なによりもまず俳優の力によって芝居を成立させる努力が求められるはずで。この空間に挑むことは、高校生にとっても、実力を伸ばす大きなチャンスとなることでしょう。この空間に負けない表現を創造してもらうために、私たちSPACのメンバーが高校演劇部の稽古場を訪問して、演出・演技に関して、積極的にアドバイスやサポートをおこないます。

●三島由紀夫が描いた、非日常の世界へ——

課題戯曲として、戦後日本を代表する小説家・劇作家、三島由紀夫の『近代能楽集』に挑戦してもらいます。これは、中世の能楽・謡曲の物語を、新たな近代の物語として復活させた、意欲的・実験的な戯曲集です。ここで三島は、選び抜かれた華麗な言葉で台詞を造型し、それによって、時代の制約を超えた究極の愛のかたちを描こうとしています。しかし人によってはこの戯曲集は、思わず笑ってしまう、少女マンガ顔負けの、大げさなメロドラマと見えもするでしょう。果たして三島は、どこまで本気で、どこまで冗談で、こんな戯曲を書いたのでしょうか？ ともあれ、三島戯曲が、その文体においてもその内容においても、我々の日常を飛び越えた、非日常の世界を垣間見せてくれることは間違いがありません。では、この非日常の世界を、舞台の上で表現するには、どのような演出・演技がふさわしいのでしょうか？ 高校生たちの創意工夫に期待します。

●もうひとつ先を目指して——

ところで、なかには既に自分たちなりの演劇のスタイルを獲得している高校演劇部もあるでしょう。普通の高校生から見れば、演劇部の活動は、既にじゅうぶん非日常の世界に足を踏み入れていると言ってもいいかもしれません。しかし私たちとしては、そこで満足せず、さらにその先を目指してもらいたい、その先を見せてもらいたいと思っています。私たちプロフェッショナルをもあっと驚かせるような、高校生にしかできない、新しい演劇のかたちを創造する実験に、ご期待下さい！